アメリカ留学報告書

国際学部２年　木村颯人

私は８月２６日から１２月１９日までの約４か月間、アメリカのノースウエストミズーリ州立大学に留学してきました。私はこのアメリカ留学のために新潟国際情報大学に入学したので、出発の日までとても楽しみにしていました。しかし、いざアメリカに向けて出発しても、あまり実感が湧きませんでした。これは私個人の問題だと思いますが、「留学」というより、「修学旅行」のようにとらえていたので、「言葉が通じなかったらどうしよう」という危機感が足りなかったのかなと思います。このような気持ちで留学に臨んだのですが、その割に私の留学準備はVISA取得以外、早めに終えることができました。

私はパスポートを５月に作り、そこから必要なものを買いそろえていきました。早めに、そして時間をかけてゆっくり必需品を買いそろえていたので、アメリカに渡っても、全くと言っていいほど物に困りませんでした。それに、ある程度の消耗品はアメリカでも購入できると思っていたので、日本を発つときはそれほど荷物は多くなかったです。焦らず早めの準備は留学をより楽しむために必要だったのかなと今になって思います。

私が苦戦したVISA取得ですが、パソコン入力でVISA面接の予約をしました。このパソコン入力では他のみんなも苦戦していました。VISA 面接はアメリカ大使館で行うのですが私はなかなか面接予約が取れず、本当に留学へ行けるのか不安になったほどでした。私の場合はパソコンでVISA面接予約が取れず、アメリカ大使館に直接電話をして予約を取ることができました。他の人が６月下旬から７月中旬にVISA面接を終えたにも関わらず、私はただ一人８月上旬にVISA面接を終えました。たくさんの人に心配をかけてしまいましたが、今となればそれもいい思い出です。

渡米当日、私たちは何人か集まって新幹線で成田空港まで行きました。成田到着後、留学へ行くメンバーの顔を見渡してみました。半分以上が顔と名前が一致しなかったので、留学中に覚えられればいいなと思いました。日本からアメリカへのフライト時間は１３時間ほどあり、私は音楽をひたすら聴いていました。私自身、長時間フライトは初だったので、暇を潰す道具があまり用意できなかったことを少し後悔しています。私たちはミネアポリス経由でカンザスシティ空港に到着しました。カンザスシティ空港にはノースウエストの人が迎えに来てくれていました。学校の寮に行く前、バスでマクドナルドに行きました。本場アメリカのマクドナルドでは、ドリンクのサイズに驚きました。日本のLサイズがアメリカのSサイズでした。そしてドリンクバーで飲み物が飲み放題という、日本のマクドナルドでは考えられない状況でした。ここで私は異文化の凄さに気づき、これから出てくるであろう異文化が楽しみになりました。立ち寄ったマクドナルドから約一時間半、ようやく私たちは寮に到着しました。私たち日本人はサウスコンプレックスとフランケンホールという寮に別れ、私の寮はサウスコンプレックスでした。私のルームメイトは日本人だったのであまり苦労なく部屋で過ごすことができました。最初の１週間はオリエンテーションばかりで授業がありませんでした。私にとっては授業よりもオリエンテーションの期間が苦痛でした。オリエンテーションは移動が多く、まだ学校の敷地を分からなかったので、何度か道にまよってしまいました。しかし今となれば、オリエンテーションである程度の場所に行ったり来たりしたことで、早い段階でノースウエストの敷地を覚えられたのではないかと思います。

オリエンテーションが終わり、いよいよ授業が始まりました。授業はAグループとBグループがあり、事前に受けたテストの結果、私はAグループになりました。渡米前から私はリスニングに少し自信があったので、先生の英語の大半が理解できたのですが、同じクラスのサウジアラビア人の英語を聞き取るのにはとても苦労しました。日を追うごとに彼の英語が理解できるようになっていき、なんとなくですが、自分のリスニング能力が上がっていることを実感できたのは素直に嬉しかったです。

私たちの授業を受け持ってくれた先生は３人います。まずはDr.フット。彼は私たちが学んだESLクラスの責任者で、ノースウエストで唯一、TOEIC を教えられる先生です。いつも冗談を言う楽しい人で、もし彼がいな

かったら私たちの留学はなかったと思うので、Dr.フットにはとても感謝しています。２人目に紹介するのは Mrs.ハーディー。A グループは彼女に「リーディング＆ライティング」を受け持ってもらいました。一見厳しそうな先生に見えますが、とても優しく、時々見せる茶目っ気がとても可愛い先生です。私はホストファミリーと教会によく行ったのですが、何度か Mrs.ハーディーに教会で会い、その後お昼ご飯を一緒に食べに行ったのはいい思い出です。最後に紹介するのは Mrs.K。彼女には「リスニング＆スピーキング」と「グラマー」を受け持ってもらいました。彼女はとても元気でパワフルな先生です。彼女もまた、いつも冗談ばかり言ってみんなを笑わせています。この３人の先生には感謝してもしきれないほどお世話になりました。今後私の人生に彼らから学んだものを生かすのが、私なりの彼らへの「ありがとう」だと思います。

私たちは授業の他に、週に２回カンバセーションパートナー(通称 CP)というものがありました。この CP はアメリカ人の生徒と１時間話をして、英会話の力を上げていくというものです。私の CP はサマンサという女性で、毎週火曜と木曜に CP がありました。サマンサとの CP はいつも時間が足りなくなるほど楽しかったです。私たちは日本人３人とサマンサで CP をやっていました。最初の話題はサマンサが考えてきてくれるのですが、私たちはいつも途中から話が脱線して、世間話をしたり、私たちが質問したりでした。サマンサとの CP はとても楽しく、帰国した今でも火曜と木曜に CP があればいいのにと思います。彼女は日本にとても興味を持ってくれたので、私たちもとても親しみやすかったです。サマンサは、もしかしたら日本に来て、英語の先生になるかもしれないので、ぜひとも国際情報大学に来てほしいなと思います。留学中盤にはサマンサの夫のベンとも知り合うことができました。彼は車が好きで、私自身も車が好きなので、彼との会話も楽しかったです。ベンが日本に来たら彼が好きな日本車を一緒に見に行きたいです。彼ら夫婦が日本に来て生活できるのを心から願っています。

そして私がお世話になったホストファミリーを紹介したいと思います。私は福王寺君とのペアになりました。私たちのホストファミリーはパットさんという男の人で、彼女のミンディーさんと暮らしています。パットさんはハンティングとバイクが大好きで、私たちも何度かハンティングやツーリングに行きました。パットさんの友人のマイクさん、リンダさんのピッツェンバーガー夫妻にもお世話になりました。ピッツェンバーガー夫妻とは毎週日曜日に教会に行き、私にとっては第２のホストファミリーです。このメンバーでパットさんの家でボンファイヤ(焚火のようなもの)をやったり、バイクでツーリングに行ったりしたり、忘れられない思い出がたくさんあります。私自身もバイクを持っているので、彼らとはとても話が合いました。ホストファミリーとの思い出は多すぎて一つに絞れないので、ここではサンクスギビングウィークについて触れたいと思います。

そもそもホストファミリーはサンクスギビングウィークで寮に入れなくなる私たちを引き取ってくれる家族です。サンクスギビングとは日本のゴールデンウィークのようなもので、１週間ほど学校が休みになります。私はパットさんの家に泊まりました。サンクスギビング前から分かっていたのですが、学校で食べる料理と比べ物にならないほど、パットさんの作る料理はおいしかったです。パットさんが自ら狩って調理した鹿のソーセージやチリと呼ばれるスープは日本でも食べれたらいいなと思ってしまいます。サンクスギビング中は大型モールに買い物に行ったり、パットさんの家の庭で銃を撃ったり、ハンティングに行ったりと、日本との生活とは全く異なる点が多く休み中でも学ぶことも多かったです。サンクスギビングウィークで特に思い出に残っているのは、パットさんの家の庭でボンファイヤをしたことです。この日は１０名以上パットさんの家に集まり、みんなでボンファイヤをしました。庭に大きな炎が立ち上げ、その炎でソーセージを焼いてホットドッグを作るという、日本では経験できない貴重な体験をしました。パットさん達にはお世話になりっぱなしで本当に申し訳なかったです。学期終了後の私たちの卒業セレモニーにパットさんとミンディーさんが来てくれました。私はどうしても二人に感謝の意を伝えたかったのですが、泣きすぎてしっかりと感謝の言葉を言えなかったのが心残りです。いつかもう一度アメリカに行って、パットさん、ミンディーさん、マイクさん、リンダさんにあの日言えなかった言葉をしっかりと伝えたいなと思っています。

こうして振り返ってみると、私の留学は人に恵まれていたなと思います。先生、CP、ホストファミリー、外国人の友達、出会う人それぞれが温かく自分を受け入れてくれて、最高の留学になりました。そして忘れてはならないのが日本人の留学メンバーのみんなです。このメンバーだったからこそ、楽しい留学生活を送れました。そして留学の機会を与えてくれた国際情報大学の先生方、私の留学を許可してくれた両親、関わった人すべてに「ありがとう」と伝えたいです。もし、留学に行こうか迷っている人がいるなら、絶対に行くべきだと思います。費用は安くないですが、それ以上の素晴らしい見返りがくるはずです。この留学経験をこれから生きていくうえで、生かしていきたいです。